

# ラストシーン

あずま渡里



# ラストシーン

あずま渡里



## ラストシーン

十二月二十三日。横浜には珍しく、雪が降った夜。

「えっ……?」

「……………」

高校一年生で冬休みを利用し、祖母の家に引っ越してきた日。日が暮れて暗くなった中、買い物から戻った司は、アパートの階段下でうずくまっていた五歳くらいの男の子と出会った。

一瞬、金色の目を瞪るが、男の子はすぐに下を向く。その黒い頭には、雪が積もり出していた。黒ずくめの子供が膝を抱え、白い息を吐く姿を見た瞬間、考える前に司は動いていた。

「っ!？」

「あ、叫ぶなよ!? 俺のウチ行くだけ……屋根の下で、あっためるだけだから!」

買い物袋を肩にかけ、小さな体を軽々と抱き上げて一階の祖母と自分の部屋に連れていく。そうすると、布団で横になっていた祖母が軽く目を瞪り、次いで優しく笑ってくれた。

「おかえり、司……あら、純くん。いらっしやい」

「こんばんは」

「ただいまばあちゃん、知ってる子?」

「ええ、二階に住んでる子よ。階段の下から動かないから、パンとかお茶とかあげてたけど……流石、男の子は力持ちねえ」

「ばあちゃん……猫じゃないんだから」

「司も、人のことは言えないでしょう？ この子は大丈夫よ。連れてきたのは初めてだけど、ご飯とかお菓子食べさせても、家の人は怒らないから……お風呂沸いてるから、一緒に入りなさい。あ、服は司の貸してあげてね」  
「あ、うん」

さらりと服を貸すよう言われて、司は純と呼ばれた子供の服がくたびれて、少し汚れていることに気づいた。それが目立たないように、黒い服なのだと解ってヒヤリとする。

「つかさ、くん？ ぼくは、じゅん。よだかじゅん」

「俺は、明浦路司。今日から、ばあちゃんと暮らすんだ」

「……あけ？ じ？」

「司でいいよ。よろしくな……さ、風呂入ろうな」

「うん」

とりあえず怪我や痣はなかったが、随分と細い。あと、いつから外にいたのかすっかり体が冷えている。

そんな純と二人で風呂に入り、体を洗ってやりしつかり温める。そして下着は仕方ないが、着ていた服の代わりに司の黒いTシャツを着せた。洗つてみると、随分と綺麗な子でワンピースを着ているようにすら見えた。

「おばあちゃん、だいじょうぶ？」

「んー……この前転んでから、歩くのが辛くてね。だから、孫の司に来て貰ったの」  
「そう」

食事の支度をしている間、純は祖母と話していた。

……祖母の言葉は半分正解で、半分嘘だ。

確かに祖母は怪我の後、一人暮らしが困難になったのだが——司が親や兄に家のことや、弟達の面倒を押しつけられているのを見かねて、祖母の介護をするのを口実に呼び寄せてくれたのだ。

高校も転校したので、今までのように実家に縛られることはない。そう思ったら、祖母と今は純の為に料理をするのは楽しかった。

「ご飯出来たぞー」

二人にその声をかけて、かき揚げを載せた引越しそばを振る舞う。子供がどれくらい食べられるか解らないので味噌汁用のお椀に入れた。ジツと湯氣を立てる温かいそばを見つめる純に、手を合わせて司は言った。

「いただきますっ」

「……いただき、ます」

「よし、偉い！」

司の真似をして手を合わせる純を褒めて食べ出したが、彼は少しだけ口をつけ、つゆを飲んだらそこで手を止めた。最初、小食なのかと思ったが、祖母がかけた言葉で違うと解った。

「純くん？ 明日も明後日も司がご飯作ってくれるから、食べきって大丈夫よ？」

「……あした、おかあさんがでかけたら、ごはんのおかねとってくる」

「ええ。お洋服もね」

「うん」

「っ」

ゆつくりとだがお椀の中のそばを食べきった純を見て、明日以降に食べる為に残していたのだと知る。

祖母がいいと言うのなら、遠慮なく色々と食べさせよう。そう決意した司は、食事を終えた後にテレビをつけ

て皿洗いを始めた。

ちようどテレビでは、フィギュアスケートの大会をやっていた。初めて観るのか、純が司に尋ねる。

「これ、なに？」

「ん？ フィギュアスケート。あんな風に滑って踊れるなんて、すごいよな」

「……すごい？」

皿を洗いながら、何の気なしに言った司だったが純は違った。ジッと司が褒めた選手のプログラムを観た後、おもむろに立ち上がってその場で踊り出したのだ。

「えっ……？」

「あら」

驚く司と祖母の前で、小さな手足が優美に動く。一回で覚えただけでもすごいが、氷上と陸の違いはあるが、何なら純の踊りの方が司には綺麗に見えた。

「すごい！　すごいし、とっても綺麗だ！」

「きれいはいい。おんなのこじゃないんだから……すごい？」

「すごい！　あと、綺麗も立派な褒め言葉だから！　星とか、花とか、神様……小さいから、天使？　そういうものに対してと同じ『綺麗』だからっ」

「……そう」

「そっだよ！」

司の言葉に、純は短く返したが——司が頷いてみせるとその目はキラキラと輝いたし、口元は微かに、けれど

確かにほころんでいる。

それから無表情に戻ったが、トコトコと皿洗いを中断していた司に近づくと、不意に腰に抱きついてきて純は言った。

「スケート、やりたい。あそびじゃなくて、ああやってテレビにでられるくらいに……どうすれば、できる？」

「俺も、解らないけど……純はすごいから、出来るように調べるな」

「うん」

司がそう答えると、純は司に抱きついたままグリグリと頭を擦りつけてきた。

素人目でも天才なのと、ちよつと褒めただけなのに嬉しそうな純を見て、司は出来るだけ彼の望みを叶えたいと思った。

※※※

翌年の三学期に、高一の司は横浜の高校に転入した。

ちなみに冬休みの間や、朝晩は純と一緒にいた。水商売をしている純の母親は暴力こそ振るわないし、通報されない程度で純の服を用意したり、数日分の食費を渡したりするが——自分が休みだったり彼氏と一緒にいる時は、純を部屋から追い出していた。

そんな純に祖母は声をかけていたようだが、遠慮してか家に入ろうとしなかった。

しかし司が抱きかかえて連れてきたので、祖母ももう少しだけ純の母に踏み込むことを決めてくれた。



「ばあちゃんが、夜鷹さんの家に連絡しておくから……司は、純くんを可愛がつてあげてね」

そう言った祖母は足を引きずりながら純の家に行き、純の母に息子を預かることを伝えた。どうなるかと思っただが、純の母親の基準は『児童相談所に訴えられるか、否か』らしい。だから、純について児童相談所に訴えない祖母に純の食費や荷物を渡し、純が司達と暮らすことを許した。

もつとも純が一回の食事を数回、分けて食べていたことから解るように渡される食費は本当に最低限で。

一方、司の実家は司を寄越したことで義理は果たしたと言わんばかりに、司の生活費を祖母に渡そうとしなかった。更に、怪我をした祖母に会いにも来なかった。

……つまり、純も司もお金に余裕がない。結果、司は祖母の世話を見ながらも、生活費と純の為に、バイトを入れるようになった。

純はテレビに出られるような——つまり大会に出ていたような、スケート選手になりたいのだと言った。

調べると、選手を目指すのなら年間百万円かかるらしい。年齢だけなら三歳からでも始められるらしいが、かかる費用を聞いたらいそいそと手が出せない。

「どうすつかない」

学校近くで見つけたスケートリンクを見上げて、けれど中には入れなくて司は呟きながらガシガシ頭を掻いた。ちなみに、純はテレビを観て初めてフィギュアスケートを知ったので、最初はまず滑られるかという問題もある。純は天才（司談）なので、すぐ滑られるようになるかもしれないが、その前に付き添いである司が最低限滑

ることが出来ないと思う。

本当に、どうしよう。そう思って、思わず深いため息をついていると知らない男性が司に声をかけてきた。

「君、スケートに興味あるの？」

司はその男性から、スケートの同好会に誘われた。

選手経験はないけれど、趣味の習いごとなどで参加者のスケート歴は長い。ジャンプもスピンの出来る。同志の知識の共有なのでレッスンはいらなと言われたし、リンクの貸し切りにも誘われて入れてくれた。

その存在を知った時、司は「これだ!」と思った。

まず自分がこの同好会でスケートを学び、純をスケートリンクに連れていけばいい。子供の純にはまだ早いですが、いずれは一緒に同好会で滑って選手になれるんじゃないだろうか。

「俺、早くスケート覚えるから……少しだけ、待ってくれるか？」

「……うん」

純は子供だが、夢を追いかける本人だからこそ隠してはいけないと司は思った。

だから、司はスケートを習うのにはお金がかかることを最初に教えた。そして今も、純の前に屈んで目線を合わせ、高いお金を払ってクラブに入る代わりに、司が同好会に入ったことを純に伝えた。

……司は高校三年生に、純は小学二年生になっていた。

祖母の介護が第一で、その合間にバイトを入れているのは変わらないが、更に司は放課後、その同好会に通った。しかしその後、司が多少滑れるようになり、次は純の為にジャンプを覚えたいと思って言ったところ——司の上達を喜んでくれていた、同好会の態度が一変した。

「素人は、ジャンプの練習をしちゃ駄目だ」

「ジャンプは、小さな頃からやってないと絶対出来ない」

「司くんは背が高すぎるから、ジャンプを飛ぶのは不可能だよ」

……否定された司は家に帰り、祖母に断ると純を連れて夜の橋梁下へと向かった。

普段は笑顔で賑やかな司が、今は真顔で無言である。それに何かを感じたのか、手を引かれて歩く純も無言だった。

「ちよつと、大きな声出しているいか？」

「……うん」

そして橋梁下で足を止め、純に断りをし離れて、すうつと息を吸うと司は拳を握って声を張り上げた。

「……大人が、子供を否定すんじゃないっ!!」

司は、自分が選手になりたい訳ではない。だから司が傷ついたと言うよりは、己のプライドを守る為に子供を否定する連中に、絶対に純を否定させまいと思った。本当に冗談ではない。

「司くん、ごめん」

「気にしなくていいよ。純……ううん、純さんが入る前に、気づけて良かった」

「何で、さん付け？」

僅かな変化だが、眼差しの揺れや声音から純が悲しんでいることが解った。

そんな純の前にしゃがんで、優しく頭を撫でながら司は言った。

「純さんには、ちゃんとした大人が……コーチが、必要だっと思ってたから。見つかるまでは、俺が純さんのコーチ（仮）になるね」

「……必要？ 一緒に、いてくれる？」

「うん」

「解った」

司の言葉に、純は頷いてくれた。

「司？ 純くん？ もう少し、二人で出かけていいのよ？」

「いいんだよ、ばあちゃん！ 走り込みはともかく、体作りなら家でも出来るし。勉強とか家事ほったらかしたら、逆に続かないからね」

「うん」

「……そうかい？ ありがとうね」

その後はクラブを物色しつつ、同好会をやめた代わりに司は祖母に言った通り、家事や勉強の合間に純とランニングや柔軟などをした。

そして、祖母の体調が良い日は二人でスケートリンクに行き、同好会で滑れるようになっていた司が純にスケートを教えた。

「人への教え方が知れたのは、良かったけど……俺のスケートって、元々は純さんの真似なんだよな」

「そうなの？」

「だって、最初に見て綺麗だと思ったのって純さんの踊りだもの。ってか、初めて滑るのに転ばずに前に進めた

純さん、本当にすごい！ 俺、立てはしてもすぐにはスピート出せなかったよ？」

「……そう」

そんな会話を交わしていたが、その後、祖母が少しずつ、けれど確実に衰弱していった。

実家に連絡しても、やはり家族は祖母に会いに来ようとしなかった。司は病院代を捻出する為にバイトを増やし、通院する時は純に家の掃除や、洗濯を手伝って貰った。けれど祖母は食事の量が減り、寝たきりになって――祖母の家に来てから二年が過ぎ、司が十八歳になった年の冬に。

「ごめんね、司。純くん」

「謝らないでよ、ばあちゃん！」

「お婆ちゃん」

「……フフ、そうね。ありがとう、司。純くん」

その言葉を最期に、二人に看取られて司の祖母は亡くなった。

このことが、司と純の転機になる。

司と純の二人三脚を見ていた祖母は介護の礼と、司の家族に奪われないように、と生命保険を利用して司に百万円を遺してくれたからだ。

※※※

話は、少し前に遡る。

祖母が亡くなっても、司の家族は相変わらず来てくれなかった。

幸い、と言うのは何だが、祖母が自分が亡くなった後の手続きについて教えてくれていた。だから、高校三年生で喪主になった司だったが、何とか祖母の葬儀や書類手続きを終えることが出来た。

……しかし、横浜にいる目的が祖母の介護だったので、司は名古屋の実家に戻らないといけない。

高三の三学期に転校するのかと思っただけだったが、進学しないのだからいいだろうと言われた。就職して、家に給料を入れると——だから司はこれからアパートを退去して実家に戻り、名古屋で就職先を探すことになる。とは言え、祖母が亡くなったのが十二月に入ってすぐだったが、祝日や年末年始もあるので冬休みが終わるまでは待つて貰うことにした。

ここで司は、家族の無関心さを逆手に取ることにした。それ故、遺産が家族に、そして司への死亡保険が振り込まれる日が決まったところで、司は純にこれからの話を切り出した。

「これで、しばらくは純さんがクラブに所属しても月謝が払えるから……鳩鳥選手のFSCに純さんのことをお願いしようと思うんだ」

同好会の面々が否定していた、司と同じ身長なのに鳩鳥は力強いジャンプを飛びオリンピックで銀メダルを取った。その鳩鳥が引退し、FSCを作った時、司の中で純の所属クラブ候補第一位になったのである。

しかし、純は別のことが気になったらしい。

「……？ そのクラブ、名古屋じゃなかった？」

「うん。だからスケートについてだけじゃなく、純さんの生活面についても相談するつもりなんだけど……どうかな？」

今までは司の家に來られたが、司が実家に戻ったらそうはいかない。また純は、放置生活に逆戻りだ。いや、男の子に言うのは何だが、ますます綺麗になつたので別の心配もある。

純の年齢だと解らないが、クラブによつては選手の為の寮を紹介して貰える場合もあるらしい。養護施設も検討されるかもしれないがそれなら尚更、横浜にこだわる必要はないと思つたのだ。

(同じ名古屋なら、いつもは無理でもたまには会えるし)

……ただこれは、あくまでも司の考えである。

だから、純にどうするか——どうしたいのか尋ねたところ、純は頷いてくれた。

「いいよ」

「っ、ありがとう！早速、連絡するね！」

そんな純にお礼を言つて、司は鳩鳥のクラブに連絡をし——土曜日の午後から、会つて貰えることになつた。

そして、土曜日。司と純は名古屋に行つた。鳩鳥の前で、純は臆することなくスケーティングを披露した。基礎の滑りから、初めて司と純がテレビで観たプログラムまで——ジャンプこそ出来ないがそれ以外は、司と二人で何度も何度も練習したものだ。

「すごいですね……これを、独学で？」

「はい。ただ俺は、純さんにジャンプも飛んでほしいんです。どうか彼に、スケートを教えて下さい。選手になりたいっていう、純さんの夢を叶えてあげて下さい！」

「……頭を、上げて下さい」

熱く語り、深々と頭を下げた学生服の司に、鳩鳥はそう言つた。おずおずと、それでも言われるままに顔を上げると、優しく微笑む鳩鳥と目が合った。

「君の気持ちは、解りました。ぜひ、純くんには私のクラブに入つてほしい……ただ、彼の親御さんは？」

「……実は」

そこで司は、純の家庭の事情を相談した。それを聞いた鳩鳥は純の親と話をし、自分の家に引き取るとまで言ってくれた。

「ありがとうございますっ！」

再び頭を下げて、顔を上げた司の目には安堵の涙が浮かんでいた。

これで、安心して実家に戻れる。そう思った司だったが、ここで純が思いがけないことを言い出した。

「司くんがいないならいかない」

「「えっ？」」

「慎一郎くんのクラブに所属するとしても、僕のコーチは司くんだ。司くんにスケートもジャンプも教えて。そうしたら、僕は司くんから教わるから」

「そのワンクッションいるかなあ!？」

「いる」

「でも俺は、実家に戻らなくちゃいけないから」

淡々とした言葉と、決して譲るまいと司と鳩鳥を見つめる強い眼差し。うっと怯み、けれど何とか純に解って貰おうとした司だったが、純は思わぬことを言ってきた。

「お婆ちゃんの介護を押しつけて、お金も渡さないで。二年間、一度も司くんとお婆ちゃんに会いに来ないのに、遺産だけ受け取って。これからも、司くんから搾取しようとする家族のところになって、戻らなくていいよ」



「純さん!？」

「純くん、詳しく」

純のとてもない暴露に、食いついたのは鳩鳥だった。

※※※

……その後の展開は、怒涛だった。

司の家庭の事情を聞き、何と司も鳩鳥に——慎一郎に引き取られることになり、家族だから名前を呼ぶようにと言われた。ちなみに純と司の親とは、慎一郎が弁護士を手配して話をつけてくれた。

そして純が望んだ通り、慎一郎は司にスケートとジャンプを教え、必死に覚えた司が純に教えるようになる。更に一緒にバツジテストを受け、純が大会に出るようになると、何故か二人でキスアンドクライで結果を待つようになった。

「……何で俺、ここにいるんだろう？」

「僕のコーチだからだよ」

そこで純は場違いだと恐縮し、つつい遠い目になる司の頬に両手を添えたかと思うと、自分の方を向かせて見つめながら言った。

「だからずっと、僕のこと見ててね？」  
「……ひゃい」

美しさだけではなく格好良さまで更新中の純に、同じ男で年上なのに司は圧倒され、真っ赤になって間拔けな  
声を上げるしかなかった。

---

---

## ラストシーン

発行日 2025 年 12 月 4 日

著者 あずま渡里  
<https://www.pixiv.net/member.php?id=3229042>

連絡先 [contact@rainbow.sakura.ne.jp](mailto:contact@rainbow.sakura.ne.jp)

印刷 シメケンプリント / かんたん表紙メーカー

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。

---

---